

汚れは広がる前に洗うのが得策

今では日本を環境対策の先進国と思う人がいるかもしれませんが、1970年代までは環境問題の方で先進国でした。急激な経済成長にともなって各地に大規模工場が建設され、大量の大気汚染物質や水質汚濁物質が環境に放出されていました。環境汚染が大規模な人的災害に結びついたのが、水俣湾の水銀汚染です。水俣に立地して窒素肥料を製造していた化学工場は、工程から排出される水銀を含む排水を水俣湾に放出していました。生産量が増加した1953年には、他の地域に見られない運動障害や感覚障害の患者が発生し、原因として化学工場の水銀排水が疑われました。しかし因果関係が立証できなかつたので、水銀排水とは無関係な奇病とされ、その後も排水の放出が続きました。やがて水俣湾近傍で猫の異常行動が見られようになり、人の神経障害も増加して大問題になりました。最終的には排水に含まれるメチル水銀が水俣湾の底泥に蓄積し、餌にしていた魚介類に取り込まれ、食べていた人が犠牲者になったのです。死亡者は漁業関係者を中心に1000人を超え、水俣湾は除染のために底泥を浚渫し、陸地に近い部分は約60haが埋め立てられました。犠牲者の賠償と対策の総費用は数百億円に達し、化学工場は賠償のためにのみ存続させる結果になりました。

これは結果論になりますが、もし肥料を生産していた化学工場が水銀排水の処理設備を設置していれば、処理費用は多くても数億円で済んだでしょう。工程から排出された段階なら、メチル水銀の濃度は高くても排出量は多くなかったからです。そうしていれば深刻な人的災害を防げただけでなく、巨額を要した漁業補償や水俣湾の除染対策は避けられたでしょう。これは一般論になりますが、環境汚染物質は下流に移行するほど濃度が薄まるものの、処理を要する排水や排ガスの量が増えます。したがって環境対策は、汚染物質の濃度が高くても量が少ない上流で対処するのが有利です。汚れは広がる前に洗うのが得策なのです。